

〈原 著〉

第40回 日本赤十字社医学会総会 優秀演題

学生の評価からみた赤十字看護教育の現状

—学生の学びの助けと自己成長—

全国赤十字旧第3ブロック副学校長・教務部長会

長野赤十字看護専門学校¹⁾ 諏訪赤十字看護専門学校²⁾

富山赤十字看護専門学校³⁾ 静岡赤十字看護専門学校⁴⁾

山田赤十字看護専門学校⁵⁾

畠山悦子¹⁾ 山岸節子²⁾ 荒井美千代³⁾

今村直江⁴⁾ 宮門郁代⁵⁾

**Present condition of nursing education in the Red Cross
from point of view of student evaluation**

—Studying assistance to students self progress level—

**The National Red Cross Former Third Block Vice Principle
Director of Educational Affairs**

Etsuko HATAKEYAMA¹⁾, Setsuko YAMAGISHI²⁾, Michiyo ARAI³⁾,

Naoe IMAMURA⁴⁾, Ikuyo MIYAKADO⁵⁾

Red Cross Nagano School of Nursing¹⁾

Red Cross Suwa School of Nursing²⁾

Red Cross Toyama School of Nursing³⁾

Red Cross Shizuoka School of Nursing⁴⁾

Red Cross Yamada School of Nursing⁵⁾

Key words: 赤十字看護教育, 学びの助け, 自己成長

はじめに

平成9年の看護教育におけるカリキュラム改正後, 各学校が特徴ある教育を行っている。赤十字看護専門学校も赤十字の理念を基調としたカリキュラムを作成し取り組んでいる。赤十字看護教育について卒業時の学生はどのような認識を持っているだろうか。その認識を把握するため, 第一段階として, 旧第3ブロック看護専門学校(3年課程)の教育目標を手がかりに, 共同研究者間で共通する赤十字看護教育の特徴を入れた卒業時到達目標を作成し第1報¹⁾で報告した。また, 作成した卒業時到達目標について旧第3ブロックの卒業時の学生に意識調査を

した。その結果の高い評価と低い評価について量的分析をし, 赤十字看護教育の現状を第2報²⁾で報告した。本研究は, 第2報に引き続き, 学生が卒業時到達目標の17項目の評価について「学びの助けになったこと」, また3年間での「自己成長の度合いとその内容」を明らかにし, 今後の指導の示唆を得るために行なった。

研究目的:

卒業時到達目標の17項目について学生の評価から「学びの助けになったこと」, 3年間での「自己成長の度合いとその内容」を明らかにし, 今後の指導の示唆を得る。

用語の定義:

- ・赤十字看護教育：赤十字看護専門学校における看護基礎教育
- ・卒業時到達目標：卒業時到達して欲しいと期待している能力
- ・学生の評価：学生自身の自己評価
- ・学びの助け：学生自身が学びの助けと感じている内容
- ・自己成長：学生自身が感じている自分自身の成長の度合いとその内容

研究方法：

1. 対象者：旧第3ブロック7校（福井・山田・富山・高山・静岡・長野・諏訪）の赤十字看護専門学校3年生 214名

2. 研究期間：2001年4月1日～2004年3月31日

3. 調査の概要

1) 調査期間：2002年2月25日～3月8日（国家試験終了から卒業式前日までの期間）

2) 調査用紙：独自に作成した『卒業時の意識調査』用紙（5段階尺度とそれに関連した自由記述の質問紙調査）（資料参照）

3) 調査項目と分析方法：

(1) 段階評価の「学びの助け」については、卒業時到達目標の17項目について「非常にできる」5から「全く出来ない」1の5段階で評価を求め、「大体できる」3以上の評価をした項目の理由を抽出した。成長の度合いについては、同様に5段階評価をした。

分析方法として「非常に成長した」と「かなり成長した」を「成長した」、「あまり成長しなかった」と「全く成長しなかった」を「成長しなかった」の2群に分類した。

(2) カテゴリー化については「学びの助けになった理由」と「自己成長の内容」について複数の内容が書かれているものは、1文節毎にラベルを作成した。その後、意味内容が類似しているものを分類し、サブカテゴリ、カテゴリ、コアカテゴリの順でカテゴリ化した。

分析結果の信頼性を確保するためにカテゴリ化の作業は、共同研究者間で繰り返し検討を重ねた。

結 果

1. 学びの助け

回収数214枚、有効回答数202枚であり、回収率は94.4%であった。202枚から「評価をつけた理由または助けとなったこと」について抽出したラベル数は2,116枚であった。類似するラベルをグルーピングし中心的内容を表札とした。これを3回繰り返し（サブカテゴリは多数のため今回は省略）、カテゴリは43枚、最終的にコアカテゴリは9枚であった（図1）。以下コアカテゴリとそのカテゴリの内容について述べる。尚コアカテゴリは『 』、カテゴリは「 」で表現する。

「実習を通して」556枚、「患者・家族との関わり」210枚、「在宅・老年看護学実習」168枚、「教師・指導者・看護師・他職種の助言」150枚、「看護過程」59枚、「記録」17枚、「実習の振り返り」3枚、「職業魂」・「看護への興味」各1枚のカテゴリであった。この計1165枚（55.1%）のラベルは、実習の様々な体験が助けとなっていることから『実習体験』とカテゴリ化した。

「講義」148枚、「赤十字関係の講義」141枚、「在宅・社会保障論の講義」35枚のカテゴリは全部で324枚（15.3%）あり、講義が助けとなっていることから『講義』とした。

「他者理解」32枚、「自己理解」30枚、「関わり合いの振り返り」26枚、「他者との関係の体験」22枚、「人間関係の演習」12枚、「自分の事を伝える」8枚、「医療事故」3枚、「体験学習」・「病気体験」各2枚、「壁にぶつかる」1枚であった。これら計138枚（6.5%）のカテゴリは、様々な体験を通しての自己理解及び他者理解や、体験学習を通して人との相互作用が助けとなっていることから『人との相互作用』とした。「看護観のまとめ・ケーススタディ」107枚、「倫理に関わる体験」18枚、「死生観」3枚、「研究発表」1枚の計129枚（6.1%）のカ

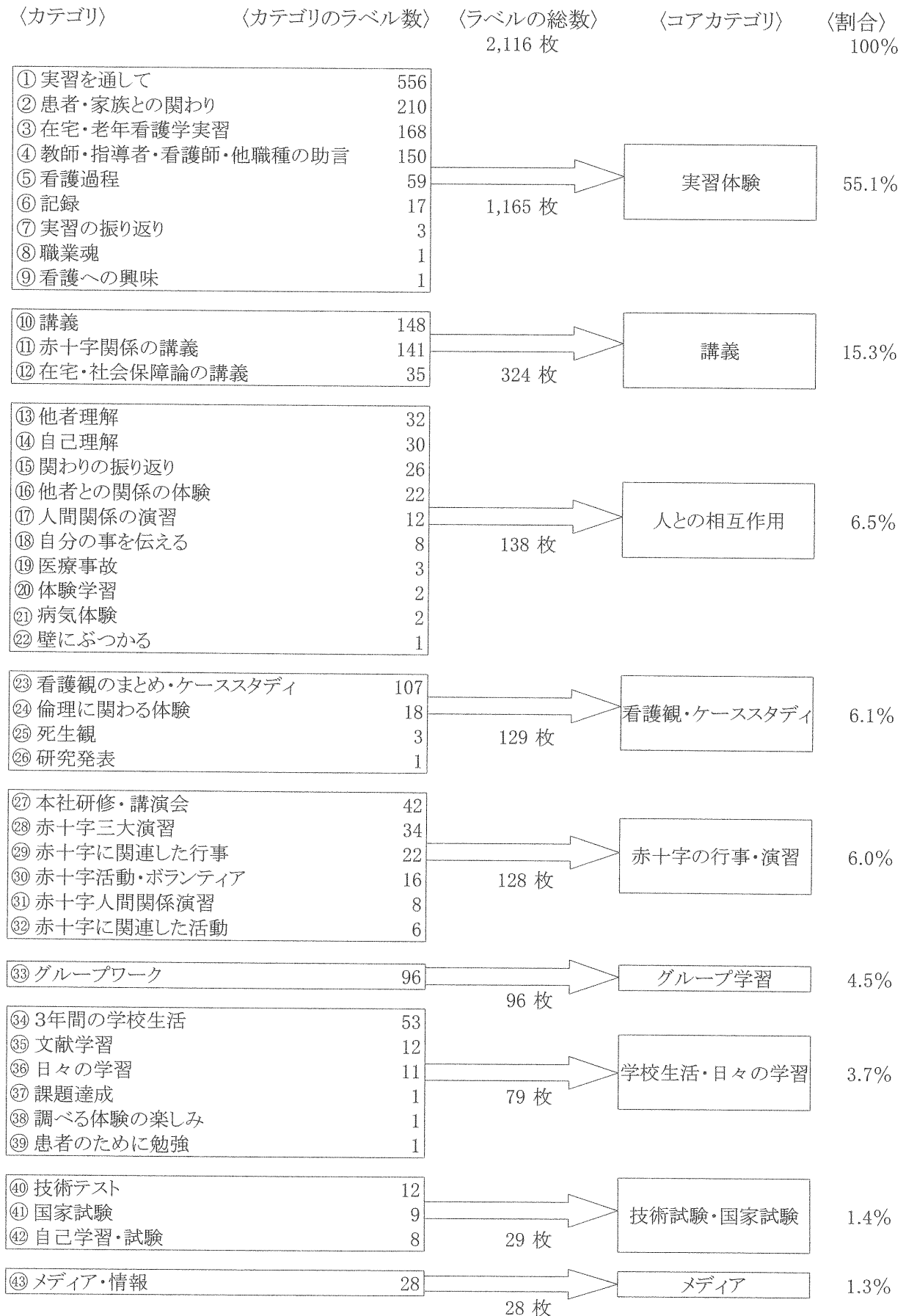


図1 「学びの助け」となった内容 カテゴリの構図

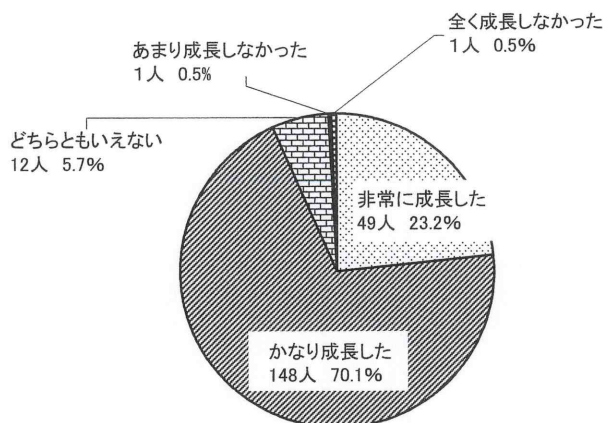


図2 自己成長の度合い

テゴリは、自分の看護をまとめ明らかにすることが助けになったことから『看護観・ケーススタディ』とした。「本社研修・講演会」42枚、「赤十字三大演習」34枚、「赤十字に関連した行事」22枚、「赤十字活動・ボランティア」16枚、「赤十字の人間関係演習」8枚、「赤十字に関連した活動」6枚であった。これら計128枚（6.0%）は講義以外の赤十字の活動、行事への参加が助けとなったということから『赤十字の行事・演習』とした。「グループワーク」96枚（4.5%）は単独ではあるが、グループワークそのものが人間関係ばかりでなく、学びなどの助けになっていることから『グループ学習』とした。「3年間の学校生活」53枚、「文献学習」12枚、「日々の学習」11枚、「課題達成」・「調べる体験の楽しみ」・「患者のために勉強」は各1枚であった。これら計79枚（3.7%）のカテゴリは、学校での様々な生活体験や必要とされた学習が助けとなっていることから『学校生活・日々の学習』とした。「技術テスト」12枚、「国家試験」9枚、「自己学習・試験」8枚の計29枚（1.4%）は試験という最終的な関門に向けて日々の学習が助けになったということから『技術試験・国家試験』とした。「メディア・情報」28枚（1.3%）は、学習していく一つの方法であるが、方法として明確に助けとなった項目としてあがってきていることから『メディア』とした。

2. 自己成長

有効回答数211枚、回収率98.5%であった。

自己成長の度合いは図2の通り「非常に成長した」49人（23.2%）、「かなり成長した」148人（70.1%）、「どちらとも言えない」12人（5.7%）、「あまり成長しなかった」・「全く成長しなかった」各1人（0.5%）であった。「非常に成長した」と「かなり成長した」は93.3%と高い成長度を示した。この「成長した」と答えた197人の内、成長できた内容を記述した189人の内容を分析した。その結果抽出したラベルの総数は419枚であり、図3の通り最終的に25枚のサブカテゴリ、8枚のカテゴリ、3枚のコアカテゴリとなった。以下、サブカテゴリの内容についてみる。まず、①自分と向き合う②自己主張③強み・弱み④精神的成長⑤ゆとり⑥自己感情の受け止めの計152枚は、自分自身への理解や表現をしていることから「自己理解と自己表現」とした。次に⑦他者理解⑧共感⑨周囲への関心⑩相手の立場にたった言動の計59枚は、相手の理解や共感に関することから「相手の理解と共感」とした。⑪人間に対する見方・考え方の28枚は「人間に対する自己洞察」とした。「自己理解と自己表現」、「相手の理解と共感」、「人間に対する自己洞察」の3つを合わせた計239枚（57.0%）は、心の内面的な変化を表していることから『心の内面的成長』とした。⑫相手との関係構築⑬仲間関係⑭人との付き合い方⑮距離をおいた対応⑯礼儀⑰助け合いの計46枚（11.0%）は「人間関係の成立と発展」とし、『人間関係の成長』とした。⑱苦しく・辛い体験⑲看護・知識・技術の自信⑳精神的強さの計64枚は、「体験を通しての自信」とした。㉑やり抜く力16枚は、そのまま「やりぬく力」とした。㉒自律した生活態度・行動㉓自己学習力の計44枚は「学習・生活の自立」とした。㉔協力㉕学び合いの10枚は「協力・学びあい」とした。「体験を通しての自信」、「やりぬく力」、「学習・生活の自立」、「協力・学びあい」の計134枚（32.0%）は、『学習・生活の自立・自信・やりぬく力』とした。

考 察

1. 学びの助け

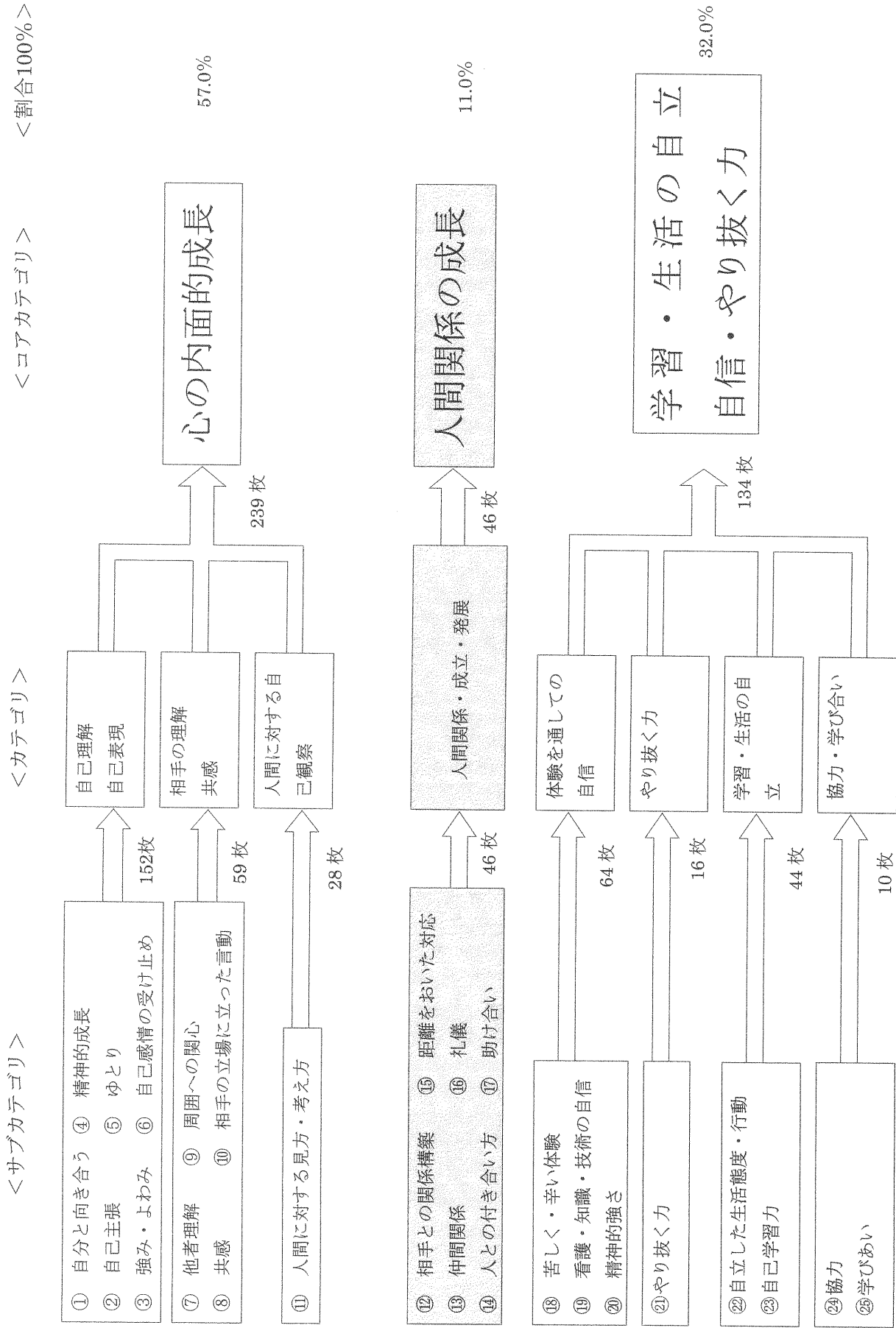


図3 自己成長の内容 カテゴリの構造

9枚のコアカテゴリ『実習体験』、『講義』、『人との相互作用』、『看護観・ケーススタディ』、『赤十字の行事・演習』、『グループ学習』、『学校生活・日々の学習』、『技術試験』、『国家試験』、『メディア』とラベル数との関連を考察する。

ラベル数が多かった項目は、『実習体験』1165枚、『講義』324枚、『人との相互作用』138枚、『看護観・ケーススタディ』129枚、『赤十字関係の行事・演習』128枚であった。なかでも『実習体験』1165枚は全体の55.1%を占めており、学生が学習として卒業時到達目標を達成するのに大きな存在であることを改めて認識できる。それと同時に実習に対する教育の重要性を示唆している。また、『人との相互作用』『看護観・ケーススタディ』『赤十字関係の行事・演習』は6%を占めほぼ同じ割合であった。これは看護の概念枠組みである「人間」と「看護」に相当し、看護の基礎に繋がる内容である。また赤十字については「行動する赤十字」を掲げ教育にあたっているが、赤十字事業や演習をはじめ関連した活動など具体的行動を見聞きし、参加することが動機付けとなり学ぶ機会になっていることが明らかになった。

2. 自己成長の考察

学生は、赤十字看護教育に関して自己理解及び他者理解や人間関係、体験による自信や学習、生活の自立面で成長できたと高く評価していた。看護学生の多くは青年期前期の不安定な発達段階にある。これらのことは、看護学生が青年期の発達課題である自我同一性の獲得に向けて、臨床実習を始めとする看護の場や仲間等様々な人との関わりの中で自身と向き合い、共感や連帯感を得ながら大きく成長していることを示唆している。

3. 「学びの助け」及び「自己成長」からの考察

「学びの助け」と「自己成長」との関連から考察する。学習の助けになる大半は実習であり、また3年間で最も成長したことは自己理解であり、自信を持つことと他者理解であった。

学生は3年間の赤十字の看護教育により自己

成長できている。さらに、学生は実習体験を通して学生同士、看護の仲間そして患者家族等様々な人々に支えられながら、自己理解・他者理解を深めている。さらに連帯感を得ながら確実に自己成長できていることが示唆された。

結 論

1. 「学びの助け」となった内容は、『実習体験』が1165枚と最も多く、全体の55.1%を占め、実習の重要性が示唆された。
2. 自己成長については自己理解・他者理解や人間関係、体験による自信や学習、生活の自立面で高く評価していた。
3. 学生は実習体験により自己理解・他者理解を深め、連帯感を深めながら確実に自己成長できている。

終わりに

今回は1年度の赤十字看護専門学校7校の検討であった。今後は、経年的な変化の中での比較検討が必要となる。また他系列の専門学校や大学との比較検討から赤十字看護専門学校の特徴や、教育体系の違いによる検証も課題である。

引用文献

- 1) 宮門郁代, 他: 赤十字看護教育の学生の評価スケール1報. 日赤医学, 55:179, 2003.
- 2) 今村直江, 他: 学生の評価から見た赤十字看護教育の現状2報. 日赤医学, 55:179, 2003.

参考文献

- 1) 小澤道子, 他: 卒業時の学生によるカリキュラム評価. 聖路加看護大学紀要, (26):133-142, 2000.
- 2) 大賀明子, 他: 看護学教育の評価に関する研究(1). Quality Nursing, 4(3):234-239, 1998.
- 3) 川越博美, 他: 教員によるカリキュラム評

- 価. 聖路加看護大学紀要, (27): 87-96, 2001.
- 4) 小山真理子編: 看護教育のカリキュラム. 医学書院, 2000.
 - 5) 小山真理子編: 聖路加看護大学におけるカリキュラム評価. 聖路加看護大学紀要, (26): 123-131, 2000.
 - 6) 厚生省健康政策局看護課監修: 必携看護教育カリキュラム. 第一法規, 1997.
 - 7) 佐々木幾美: 学生の行動変容からみた成長過程. 看護研究, 31(6): 513-521, 1998.
 - 8) 濱田悦子, 他: 卒業生からみた看護系大学教育の評価に関する研究. 平成 6 - 8 年科学研究費補助金研究成果報告書. 1997.
 - 9) 舟島なおみ: 看護学教育評価論一質の高い自己点検・評価の実現. 文光堂, 2000.
 - 10) 宮岡久子: 看護カリキュラム評価の現状と課題. Quality Nursing, 2 (2): 100-106, 1996.
 - 11) 看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標 (看護学教育のあり方に関する検討会報告). 看護教育, 45: 439-462, 2004.

資料：

卒業時の意識調査

I 卒業を前にして3年間の学校生活を通してあなたは次に挙げる能力をどのくらい身につけることが出来たと思いますか。

- ・それぞれの項目について該当する番号に○をつけて下さい。
- ・その評価をつけた理由または助けとなったことは何ですか。〔 〕に記述をして下さい。

	出 来 な い	出 か な り	出 だ い に	出 あ ま り	出 全 く
1 人間を身体的・精神的・社会的に統合された存在として理解する。	5	4	3	2	1
2 健康の概念について理解する。	5	4	3	2	1
3 科学的根拠に基づいた看護を実践する。	5	4	3	2	1
4 対象に応じた看護を実践する。	5	4	3	2	1
5 看護過程を展開する。	5	4	3	2	1
6 自己理解・他者理解を深める。	5	4	3	2	1
7 他者との関係を円滑にはかる。	5	4	3	2	1
8 人間として常に相手を尊重する。	5	4	3	2	1
9 看護職としての職業上の倫理や、生命倫理について理解する。	5	4	3	2	1
10 専門職業人としての自覚をもつ。	5	4	3	2	1
11 課題や疑問に対して自ら追求する。	5	4	3	2	1
12 自己の看護観を深める。	5	4	3	2	1
13 他職種との間で調整力を発揮する必要性を理解する。	5	4	3	2	1
14 保健・医療・福祉チームにおける看護の役割について理解する。	5	4	3	2	1
15 保健・医療・福祉制度を総合的に理解する。	5	4	3	2	1
16 赤十字の理念や基本原則を理解する。	5	4	3	2	1
17 赤十字の諸活動に関心を持つ。	5	4	3	2	1

II 3年間の学習や生活を通して、あなたは成長出来たと思いますか。該当する番号に○をつけて下さい。

非常に成長した 5, かなり成長した 4, どちらとも言えない 3,
あまり成長しなかった 2, 全く成長しなかった 1

- ・それぞれの番号に該当する下記の問いに答えてください。

(1) 5・4に回答した人は次の問いに答えて下さい。

① 自分はどのように成長出来たと思いますか。

② あなたの成長を助けたものは何ですか。

(2) 3・2・1に回答した人は次の問いに答えて下さい。

① 「どちらとも言えない」または「あまり成長しなかった」、「全く成長しなかった」理由は何ですか。

III 看護専門学校での3年間を通して最も印象に残ることは何ですか。